



大臣  
次官

114  
A 768



第七報告

外務大臣伯大隈重信閣下

フレデリク・マルシアル報

巴那麻運河

巴那麻運河会社ハ獨リ其事業ヲ繼續スルノ金錢ヲ提供  
シ得サルノミナラス亦巴ニ獨立会社トシテモ存在スルヲ得ス而シテ  
官存ハ之ヲ以テ之ニ還債處分ニ附シタルモノト看做シ其監

大正十一年四月  
大隈侯爵郵寄贈

小村





皆モ最早其社長及之理事ノ手裏ニアラスレテ還債處分  
者ノ在右<sup>管理</sup>ル所ト成レリ又本会社カ工事ニ從事セシハ茲ニ七年  
ニシテ其負債已ニ七千餘磅餘ノ多キニ達セリ事情已ニ如斯  
シ然レハ則チ本社差久ハ他會社ニ於テ運河ヲ強功スル旨望  
ノ如キハ盡ク之ヲ放棄セシトスルモ蓋シ其當ヲ失ハサレハ  
會社ノ家敵中巴里存ニ於テ本社ハ破産處分ヲ受クヘキナリ  
ト云布セシトシテ企シ者アリ但此場合ニ於テハ讓與ノ直ニ消  
滅スヘシト雖モ此計畫未ク其効ヲ奏セズ然リ而シテ昨審

裁判所ハ本会社ハ商法ノ支配ヲ受リヘキヲ以テ破産法ニ準據  
シ之ヲ處分シ得ト判決セシカ控訴院ハ控訴ヲ受ケテ前判  
決ヲ破棄シ更ニ判決ヲ下シテ同ク本會社ハ民法ノ支配ヲ受  
クヘキモコレテ商法ニ由テ處分スヘキモノニ非ズ故ニ之ヲ破産セシレ  
ルヲ得スト以是本社ハ目今法律上還債處分ニ附セラレ此有様  
ニテ間接ニ未ク存在ス尤モ他日最後ノ裁判ヲ受クヘキ強シトス  
ク疑フス蓋シ佛國法律カ如何ナル方法ヲ以テ本会社ヲ解散シ  
得ヘキヤハ公衆ノ問題トスルニ非ズ之ヲ事業ノ性質ヨリ論

卜  
務  
省



シ又其代表者カ書ク信用ヲ失ヒシ事ヲ視レハ向後<sup>但</sup>工事ヲ  
完結スルノ爲メ社ヲ得ルヤ否ヤ世人ノ喋々<sup>ハ</sup>所即チ是ニアリ今  
衆庶ノ信<sup>ハ</sup>所ヲ以テ視レハ如斯キ会社ハ之ヲ設立スルヲ得ル  
工事(今日唯其一端ニ着目セシモノ)ハ數日ヲ出スレテ全ク之ヲ故  
棄シ已ニ使用セシ金銀ハ單ニ徒費<sup>ト</sup>シテ<sup>ハ</sup>ニ<sup>ク</sup>アリ

前向ニテ月間ニ出板セシ書籍ニシテ運河ノ爲メニ<sup>或ハ</sup>成ルニ  
對テ試ミシモノ一ニシテ是<sup>ハ</sup>今此等ノ書ヲ備讀セ、其得ル所益  
レサレトスル<sup>ハ</sup>其議論ノ互ニ相矛盾スルモノ固ヨク多シロ也

復以テ論據ト爲スニ足ルハキモノアリ此論據ニ憑テリ推測シ得ル  
所ニツアリトシ

一 会社ノ撰定セシ方向及ヒ其採用セシ方法ニ由リ運河ハ刻  
底之ヲ開通スルヲ得ス

二 金銀ノ濫用

三 社務ノ監理大ニ其宜キヲ失ヘリ

抑事ノ此ニ至リシ所ハソ鮮シトモ、レセソル氏カ夥多ノ仙蘭人<sup>也</sup>  
對シテ非常ノ執力ヲ用メシヲ記セサレハカラス、且舞士運河ノ成効

ト 務 小 目



並ニ此事業ヲ監視スノ際氏カ表示セシ剛毅及ヒ其胆力ハ氏  
ニ由ラフルニ其時第一ノ實業家タルノ芳名ヲ以テセリ故ニ衆民以  
謂ラク氏ノ剛毅所ニ諸事必ス成就スニシト故ニ氏ヲ賛賞稱スルモハ  
氏ヲ呼ンテ仙國ノ高家傑トセリ而シテ仙國外ニテハ人氏ヲ信セリ  
リシトモモ佛必内ニテリテハ概テ皆氏ニ信憑セリ故ニ千八百七十九年  
氏カ巴那麻運河ノ計畫ヲ始メレリヨリ其時氏多クハ氏ノ論ヲ信  
シ氏カ言フ所皆確實ナリト認メタリ然レ是年氏カ工師委員ヲ撰  
定スルヤ氏カ公團金ヲ開クヤ氏カ演説ヲ作セヤ人皆書ク之ヲ

信シタリ然リ而シテ反對論者ノ揚言スル所ニ由リハ此計畫ハ決シ  
テ實行シ得ヘキモノニ非ス又假令ヒ實行シ得ヘシトモ其費用ハ  
豫算ニ超過スルニ極メテ多シト云フニアリ又此水ノ論者ノ特ニ駁  
スル所ニ由リシレモ氏ニシテ事成ルノ日ニ至ラハ必ス蘇士運河ノ便  
易ヲ他ニ轉シ該事業ノ収獲ヲ減殺スルカ如キ運河ヲ開鑿セ  
ハ到底不徳義ノ諫ヲ免シタト此等ノ駁論ハ所多ク其効力ヲ  
顯スニ至レリ以是レモ氏カ其賛成者中ニ煽動セシ熱心ナル  
ニ抱ラス千八百七十九年八月ニ募集ヲ始メレ八十萬ノ株ヲ悉皆賣

卜  
務  
省



書スヲ得ニ費ニ再ヒ募集ヲ試ルルハ成レリ抑是年新ニ金ヲ  
開キ新ニ演説ヲ依レ新ニ趣旨書ヲ刊行シ費ニ千八百円年  
十二月ヲ以テ再ヒ会社ノ設立ヲ試シテ今回ハ充分ノ好結果ヲ以  
テ募集金高徳株ノ二倍ニ達シタリ

之ヲ余ハリウテナレト、ワイズ、ヲ統領ト仰キレ一隊ノ冒險者ヲ運河  
ノ右トシテコロロニア政府ヨリ土地讓與ノ許可ヲ得シイサ説明ニシ  
右讓與地ハレセツガ氏ニ賣讓セシモノニシテ其價ノ半額ハ現金ニ  
テ残り半額ハ会社ノ株券ヲ以テ受取ルルトセリ而シテリウテナレト

四十萬磅ニテ

ワイズノ言フ所ニ由レハ組合ノ費用ハ凡四萬磅ナリシヲ以テ最初  
讓與ヲ受シ者ノ利益巨大ナリシハ百シテ然ルリ又千八百一  
年三月ノ第一株主總會ニ於テ右創立費トシテ百を以テ五千磅  
ヲ仕拂フノ承諾ヲ得タリ故ニ本名社ハ最初不生産的ナル百  
四拾餘萬磅ヲ以テ創設セシモノト多クハ知レシテ此金ハ誰ノ豪裏裏  
ニ納リシヤ未タ之ヲ知コエト雖モ他日必ス之ヲ聞知スルハハ  
会社設立ノ時ニありレセツガ氏ハ株主ニ誓フテ曰ク本運河ハ之ヲ開鑿  
スルハ蘇士運河ヲ容易ナルハリ運河ノ徑ニ至ル土地ハ業候健

蘇士運河



東ニ直レク且ツ運河ハ全途平坦ニシテ水閘ヲ用ケザンハ  
土地ノ氣候健康ニ適クヤ否ヤニ就テ云フニ工事ニ後事セシ者  
熱病ノ為メ死センヤ凡四分一ナリト今日人ノ許ス所ナリ  
工事ノ難易ニ就テ云フニ今一事ヲ舉グレバ充分ニ工事ノ難事也  
何ヲ示スニ足ルヘシ

蘇士運河ハ長サ八十七海里ニシテ西端ニ於テ潮ノ平均高低差  
僅カニ四呎六寸ナリ加之ナラス運河中大湖ノ凡ソ以テ右潮ノ高低  
より生ズ海流ヲ調和ス然ルニ此利ヲ得ルニ地ヲス春潮ノ

際ニハ蘇士及ヒピツタル湖間ニ尚ニメトリ半ノ海流顕起又巴那  
麻運河ハ長サ四十海里ニシテ其間湖ナク西端ノ春潮差凡  
二十呎ニ達ス而シテ初メテ工事ヲ計畫セシ際ニハ巴那麻口ニ  
潮閘ヲ設ケ此難事ヲ避ケルノ企圖ニシテ其費用ツ八十萬磅  
ト算定セリ然レトモ此潮閘ツ無用ノモノトシ且ツ揚  
言シテ曰ク水ハ故障ナク海より東ニ通ラスヘシト又運河カ地峽  
ノ山頂ヲ横断スル所ニ至リテハ其高サ海面ツ拾リテ實ニ三百五  
十八呎ナリ故ニ運河ニシテ差シ平坦タラシメシカ前障ノ高サツ

ト  
秀  
小



下シる別ニ此ニ運河ヲ開鑿スヘキモノトス如斯ク開鑿ハ未ダ  
 曾テ開知セサル所ナリ而シテ此ノ利底実行シ得ト認定セシテ  
 此ノ千七百八十一年有レセツカ氏ハ明言シテ曰ク平坦地ニ之ヲ故  
 業セカント得ヌ運河ハ方ノ海ヨリ山嶺ニ昇リ又對岸ノ海ニ向テ  
 降ルヘク又運河ヲシテ如斯ク山嶺ニ到ラシメシハ十箇ノ水閘ヲ  
 要スヘク即シテ其最高點ハ海面上百七十呎ニアルヘシト(五對者ノ  
 確言スル所由シ、右ノ高サニ水ヲ昇シテ運河ノ上流ヲ溢ルル  
 持ル)カ如キハ到底之ヲ為スヲ得ヌト又曰ク十箇ノ水閘即費豫算ハ千  
 六

六百萬磅ナリト然リ而シテ此計畫ノ如ク運河ノ中部ヲシテ海  
 面上百七十呎ニ到ラシムルヲ得ルモ(レセツカ氏ハ此事容易ニ成ルヘシト  
 唱ル)而シテ二千五百萬立方メートルノ岩石ヲ開鑿スヘキ事アリ故  
 ニ此ニ消失セシ七千萬磅ノ外ニ消費スヘキ總金額ハ一般ノ費用  
 ヲ合算シテ或千五百萬乃至二千萬磅ニ到ラサルヘシ加之ナラス  
 運河ノ下部ニ沿流セルチアグレ河景流セルカ為ノ開鑿事業業ノ  
 害ヲ受シイサレトス而シテ最除而シテ大堤ヲ築クニ非セバ  
 洪水一漕ニ至ル多ク流失スヘキヲ該見セリ此ハ誤謬見ル  
 小 務 自



考見しじに此れノ困難ルヲ覺知シ又此れノ危險ニ遭遇セシニ  
抱ラスレモル氏ハ今尙特有ノ耐忍ヲ以テ更ニ新会社ヲ起シ以  
テ金銀ヲ募ル集メテ運河ヲ浚成セシメシラス蓋シレモル氏カ失  
敗スレト確陳スルニ未ダ早シト爲セ之ヲ仙國內外ノ輿論ニ徵シハ  
氏ハ効ヲ奏シ得ルニシテ諸事盡ク放棄セラルハレト云フナリ  
而シテ新会社ヲ解ノ後ニ至リ新会社顯出シ既成ノ工事ヲ無事ニ  
獲得シ其放棄ヲ言フ者ヤ亦久ク知ラスト爲セ今日ヨリ云々如  
斯キ計畫ノ徵候ナシス

此等ニ當リコロロビア政府ハ讓與ヲ取消スノ機會ヲ求メテ止ム  
又ハ各國政府ハ公之ヲ爲シ本件ニ関シ他政府ノ干渉スルヲ許  
サスト苦ケナリ故ニ仙國政府カ公認之ニ干渉シ以テ仙國ノ株主及  
債主ヲ救助スルノ途ヲ断絶スル昨昨仙國人ノ所有スル株主債  
主<sup>本存社</sup>ノ資金總額ハ七千五磅<sup>以上ハ居ル仙國人ノ所有スルナリ</sup>超スナリ

千九百零九年三月廿七日 於武當頓

卜 券 省



